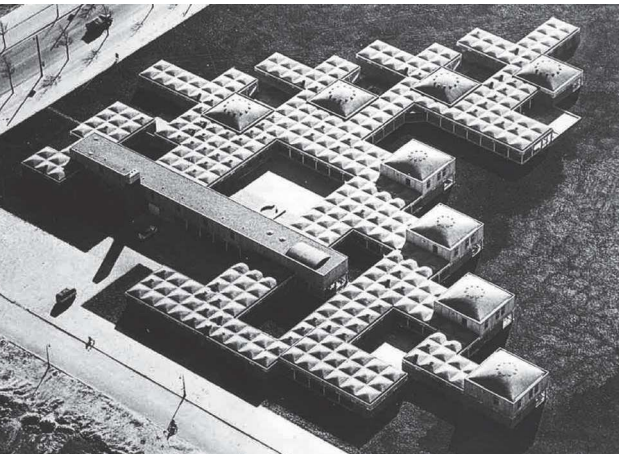
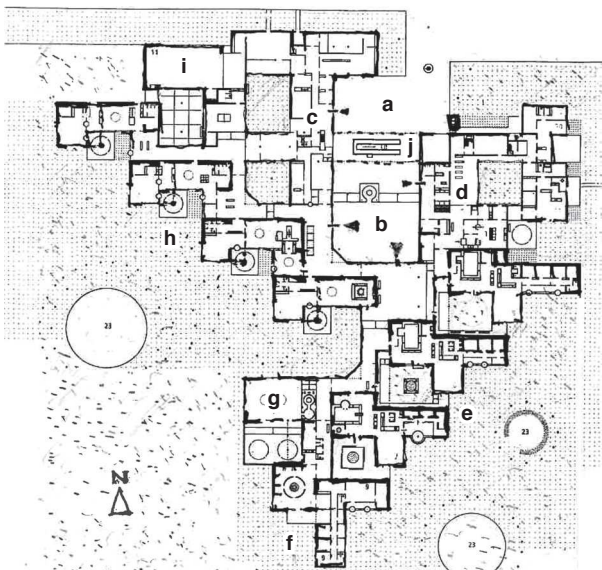


## アムステルダムの子供の家 1960年 アルド・ファン・アイク



北西からの鳥瞰写真 (『Aldo Van Eyck Works』Birkhauser社より)



1階平面図 aフロント広場 b中庭コート c管理事務室  
d厨房、洗濯室 e年少児生活ユニット群 f児童病室棟 gパーティ室  
h年長児生活ユニット群 i体育室兼劇場 j上部2階スタッフ寄宿舎



左上 年少児生活ユニット群 右上 年少児生活ユニット。右側が個室  
左下 年長児・青年生活ユニット群 右下 年長児・青年生活ユニット 2階は個室

### 「まちのような家、家のようなまち」の空間

ドゥブロンニクで1956年に開かれたCIAM・10回大会は、近代建築を主導してきた巨匠たちと会議を準備した若手の建築家たちの意見が対立し、CIAMは解散する。ル・コルビュジェは、伽藍が白かった時代のように、近代建築、近代都市の偉大な総合への努力を求めた。それに対し若手の建築家たちの関心は、拡大変化を続ける都市の現実と増加一途の車による混乱であり、それに関わる建築の有様であった。彼らは直後にチームXを結成する。アムステルダムの「子供の家」の設計者ファン・アイクはその一員だ。

場所は、市街の外縁にあり、東側には都心とスキポール空港を結ぶ幹線道路が走り、北側には道路と運河を隔ててオリンピック・スタジアムが存在する。

この施設は孤児院である。子どもは生後数カ月から20歳までの約125人だが、市中の子ども同様に幼稚園や学校に通い、働きにも出ている。スタッフは約40名でうち12名は施設内に住む。

子どもの生活棟は年齢別に、0歳から10歳までと10歳から20歳までの2群に大別している。年齢別小集団のプレイルームでもある共用空間と個室群を1ユニットとし、年少側は乳児から10歳までを4ユニットに分け、それに児童病室棟が加わる。年長側は10-14歳、14-20歳の年齢別をそれぞれ男女に分けて4ユニットだ。2群は各ユニットに中庭テラスを組み込み、日照などの公平性に配慮してクラスター状に雁行配置している。年少群は平屋だが年長群は個室が2階である。これらが内部通路で繋がっている。

訪ねる人は、交差点から広めの歩道を進み、左折してフロント広場に入り、2階建てのスタッフ棟のピロティをくぐり中庭コートに到達する。そこに面して年少、年長各々の入口がある。都市空間から迎入れの空間、内部的外部の中庭、仕上げが外部と同じ外部の内部の内部通路、共用空間、そこを経て個室に至る。子どもはこの逆をたどって学校他に出かけるのであり、都市空間・社会へ向かい段階的に開放度を増す緩衝媒介空間が注意深く設定されている。

スタッフ棟以外の複合的な空間は、円みのある方形屋根の3.36m×3.36mのユニットと、1辺がその3倍の大きな方形屋根を載せる2タイプだけで構成している。外観は小さな家の群れのようにも見える。設計者は、見上げがドーム状の大小の屋根が連続する空間を歩みながら、部分と全体、小世界と大世界、統一と多様性の対比の感受を望み、「まちのような家、家のようなまち」を意図したのである。

現在はNPOなどのオフィスとして活用されている。オランダは大分前に12歳以下の施設擁護は廃止し、里親委託に変え、さらに家庭内支援、家族再統合を推進している。